

作	曲	少	女	2			
---	---	---	---	---	--	--	--

《番外編》

5月20日のハッピーバースデー

仰木日向

2020.5.20 ヤマハ特設ページ掲載

「ねえ珠ちゃん、『ハッピーバースデーの歌』ってあるじゃない？」

「……ああ、あるな」

「あれってさ、誰が作った曲なのかな？」

少し梅雨の気配が漂ってきている5月20日の放課後。今日の作曲部（ほんとは作曲同好会）の活動が終わり、夕方18時のまったりした時間。部員4人がそれぞれに機材とかを片付けている教室の中で、私はなにげなく、さりげなくハッピーバースデーの話題を振る。

……今日は実を言うと、私の誕生日なので。

「あれはアメリカ人の誰だっけな？　なんとかって姉妹が作った曲なんだよ。実はそんなに古くない曲だ」

「へえ、そうなんですわね。わたし、あれはどこかの国の民謡なのかと思っていました」

珠ちゃんのコメントに、うぐいすちゃんがリアクションする。違う、そうじゃない。そうじゃないんだ二人とも。『そういうえば誕生日っていつ？』っていう話題にしたいんだ私は。ナチユラルな流れで誕生日の話に持っていきたいんだ。

……失敗したなあって思ってる。実は1週間前くらいから、そろそろ私の誕生日なんだって

何度も言おうとしたんだけど、なぜかことごとくタイミングが合わなくて結局今日になってしまった。……いや、別にプレゼントが欲しいとかそういうわけじゃないんだ。なんかこう、別にね？ 祝って欲しいとかそういうわけでもないんだけど……なんかね、わかるでしょ？

「あら、本当ね。珠美さんの言うとおり、検索してみたら『ハッピーバースデーの歌』はアメリカのヒル姉妹が作った『Good Morning to All』っていう歌の替え歌らしいわ。ついでに言う、この歌は世界で一番歌われている英語の歌としてギネス記録にも載ってるらしいわね」

そこに、悠ちゃんがコメントを重ねてくる。へえ、ハッピーバースデーの歌ってギネスに載ってるんだ。……じゃなくて！ いや、それはそれでなんか面白い豆知識だけど、そうじゃなくて、誕生日の話題……。

——これは難しい。難しいんだよこれは。だって、ここでもし私が『ところで珠ちゃんの誕生日っていつだっけ？』なんて聞いてちゃった日には、もうだいぶアレな人になっちゃうもんね。どんだけ自分の誕生日知って欲しいんだよみたいな。そうならない形で、うまく誕生日の話に持ち込みたい。……そもそも、さつきハッピーバースデーの歌の話を私が振った時点で、もうかなりギリギリなんだこれは。

「———そういえばさ、今日はある人の誕生日なんだよな」

きた！ ナイス珠ちゃん！ さすが珠ちゃん！

「えつ！ えつと……誰ですか？」

「今日？ 誰かいたかしら？」

つていうか珠ちゃん知ってたんだ？ 知ってたならそう言ってくれたらいいのに。あ、どんなリアクションしよう。エ？みたいな感じがいいかな？ そういえばそうかー忘れてたーみたいな？ 天然つぼくつていうか？ ああでも、それはそれでしーらじらしいかな？

「今日はなんと、ヤマハの創始者、やまはとらくす山葉寅楠の誕生日だ！」

誰！？

「へえ〜っ！ そうなんですか〜」

「よく知ってるわね珠美さん」

ええええええええええ！？ そうなの！？ ヤマハって、楽器のヤマハだよね！？ いや、そういうこと知ってるのは珠ちゃんぽいとは思うけど……ええ！？ 私と同じ誕生日！？ え、そ

私の誕生日の話は！？ 珠ちゃん、私の誕生日知らないの！？

「……そ、そうなんだあ。ビックリー」

「山葉寅楠はあたしの尊敬する人物の中でもかなり重要な一人だったりするんだよな。すごいんだぞ、山葉寅楠は！ 坂本竜馬より少しあとに生まれたくらいの人だから、かなり幕末ドンピシャの時代背景だよな。明治大正に活躍した人だ。小さい頃から機械いじりが好きな少年だったらしいんだけど、最初は医療機器とか時計とかの修理技師をしてたんだよね。それである日、小学校のオルガンの修理を頼まれて、それがヤマハ伝説の始まりになったんだ。オルガンの構造を理解した山葉寅楠は、これなら自分でも作れる、なんなら、輸入オルガンよりもっと安く作れるって思ったらしいんだよね。もちろん、音楽機材だからいままでの修理技術とは違う『音の知識』も必要になるから、その分苦労もあつたらしいんだけど、さすがの試行錯誤で、その13年後にはピアノも作るようになる。ちなみにこの時点で時代的には1900年なんだけど、考えてみればいまから1世紀以上の話だよな。で、山葉寅楠のすごいのはここからなんだよ。その3年後、1903年からは家具とかも作るようになったんだよな。そういういた金属や木材の加工技術が評価されて、戦争時代には軍用航空機のプロペラ作りなんかも手がけるようになる。ちなみに、プロペラを作るついでにエンジンも作っちゃいましたとみたいな話がネットには流れてたりするけど、あれは実は違うんだよな。実際は、第2次大戦が終わってから、役目を終えたその工場で作ろう？ってことになって、じゃあバイク作るかーってことになった。これがのちのヤマハ発動機、バイクの方のヤマハになっていくわけだな。バイ

クの方のヤマハもそりゃあもう、さすがの精度で組み上げられる見事な逸品で、なおかつデザインもトレンディだった。性能もトップクラスだったから、ヤマハ発動機の会社が設立されてすぐにオートレースの大会で優勝しちゃったりしてね。あつという間にヤマハのバイクの凄さは評判になったわけだよ」

ああ、珠ちゃんのうんちく熱量がすごい。へえ、そうなんだ。山葉寅楠さん、凄い人だったんだなあ。……私の誕生日の話……。

「そしてそして、話は楽器の方のヤマハに戻るんだけどさ、時代は電子オルガン、つまりエレクトーンに差し掛かるんだよな！ 昭和ノスタルジーを感じるナイスなデザインのエレクトーンが色々作られたのがその時期だ。そして、あたしも大好きなシンセサイザーYAMAHA DX7シリーズが、当時まだ敷居の高かったシンセサイザー業界に大革命を起こす。その血を受け継いだのが、いま売ってる小型鍵盤のYAMAHA reface DXだったりしてね。あたしのメイン制作環境にも入ってる名機の一つだ。ちなみに、いろはの使ってるシオルキーSHS-500の鍵盤は、このreface DXと同じ鍵盤なんだよな。だからそのシオルキーは打鍵感がそこいらの小型鍵盤とは違うわけだ」

「へえー、私のシオルキー、なんかそういう良いの使われてるやつなんだ？」

「うむ！ あと、そのシンセの時期に実はヤマハはパソコンなんかも作ってるんだよな。パソコン事業自体はいまひとつ当たらず退いたけど、そういうデジタル技術が数十年後にポ

「カロイド『初音ミク』を開発する静かな火種になっていく……!」

「初音ミクはさすがに知ってる! そっか、初音ミクを作ったのもヤマハなんだね」

「そう! まあ、キャラクターというよりはその歌声合成技術の方だけだね」

「……さすが珠美先輩、本当に詳しいですね」

「ヤマハはあたしの好きな楽器ブランドの中でも相当上位にあるからな。特にモニタースピーカーのMSP5はマジでいいぞ。みんな買ったほうがいいぞ。MSP5じゃなくてもう一つ小型のMSP3でも自宅環境には十分過ぎるクオリティだな」

「……吹奏楽部の中では、ヤマハの楽器は無個性だとか、なんかそういうことを言われていた印象ですけど、あれって実際はそうなんですか?」

「ヤマハの楽器が無個性とはずいぶん物言いだよな。ちゃんと作ってるから変な偏りが無い、演奏家自身の個性がハッキリ出る楽器と言ってもらおう。あとまあ、吹奏楽部とかで妙にヤマハの評価が低いのは単に、ろくに整備の仕方知らない学生が乱暴に扱ってポロポロになつてる可哀想な楽器が沢山あるから、だと思っよ。ヤマハの楽器のポテンシャルはガチだ。ちゃんと整備すればその分しつかり鳴ってくれる。あとはあれだな、日本においてヤマハは普及し過ぎて『物珍しさが無い』ってところじゃないかな? 実際、あたしがアメリカに行った時にはヤマハの楽器は普通にめちゃくちゃ人気だったしね」

「はあなるほど、そういうことなのかもしれないですね……」

ヤマハの話、めっちゃやるなあ。……まあ、いいか。もうすっかり誕生日の話題じゃない

し、いま無理に誕生日の話にしたら、それこそアレな人になっちゃうもんね……。

*く*く*く*く*く*

タイムリングを逃し続けた私は、そのまま結局下校時間を迎える。楽器とパソコンを片付けて、教室の見回りに来た用務員さんに挨拶をして、みんなで校舎を出て校門に向かって歩きながら、でもやつぱり、モヤモヤぐずぐず考えてる。

……なんかもう、いきなりでいいかな？ 実は私、今日誕生日なんだーって。ライトな感じでね。よし。みんなの会話の途切れるタイムリングを狙って……。

「そういえば私の乗ってるバイクもヤマハ製なのよね。ドラッグスターっていうんだけど」

「ああ、そういえば江戸川ちゃん、バイク乗ってるんだよね」

「かつこいいです」

「あら、よかつたら見てもらえるかしら？ 先輩から譲ってもらったお気に入りなの♪ 実はその喫茶店のオーナーさんがその先輩の親戚で、お店の駐車場に停めさせてもらってるのよね」

「へえー！ いいねいいね、見せてもらおう！」

「わたしも見たいです、ものすごく！」

うわあ、盛り上がっちゃってるなあ。タイミングないなあ。つていうか、珠ちゃんもうぐいすちゃんもそんなにバイクに興味あるんだ？ 私もまあ、悠ちゃんが乗るバイクはかっこよさそうだし（たしか大きいやつらしいし）ちょっと面白そうだなとは思うけど、特にうぐいすちゃんが食いついてるのは意外かも。バイクとか好きなんだ？

「じゃあ、ちょっと寄っていきょうかしら。ついでにコーヒーでも頂きましょう♪」

ああ、タイミングが……いま言っちゃおう！

「……ねえみんな、実はね。私、今日——」

「——あたし喉乾いちゃったなあ。バイクより先に喫茶店入らない？」

「あ……。うん。そうだね。先に喫茶店入るっか」

タイミングが合わない。下手くそだなあ私。なんか、大縄跳びでずっと入るタイミング探してる人みたい……どのタイミングで言おう。お茶してる時とかになんとか言おうかな？ 難しいな……。なんかもう、逆に嫌になってきた。誕生日じゃなければこんなことにならなかつ

たのに……。もう黙ってようかな。

学校の目の前にある、喫茶店バードランド。珠ちゃんとたまに来るこのお店だけど、店内の雰囲気がちんまりとして良い感じなんだよね。レトロっていうか、アンティークっていうか。大きめのスピーカーからジャズっぽいレコードが流れてたりして、お店の中に楽器が飾ってあったり。ちよつとステージっぽいスペースもあつたりして。日によってはここで何か演奏とかしてたりするのかな？ 4人でこの喫茶店に来たのは初めてかも。ちよつと楽しい。

「いろは、その席」

「え？ うん。……。あれ？ なんでみんな座らないの？」

「よし、座ったな。じゃあ、うぐいすよろしく♪」

『オホン！ アーアー。えー……。では、司会はわたしがやることになったので……。すいませ
ん、司会のうぐいすです』

「え？」

店内にあるスピーカーのところから、エコーのかかったうぐいすちゃんの声が聞こえる。次の瞬間、お店の電気がバンツと消えて、スポットライトみたいな電灯で、ステージっぽいその段差の上に立っている珠ちゃんと悠ちゃんとうぐいすちゃんが照らされた。

『それでは、山波いろは先輩の誕生日パーティーを始めたいと思います！ 聴いてください。作曲・黒白珠美で、《いろはのテーマ》！』

何の説明もなく、突然始まったオンステージ。私にリアクションさせる隙間もなく、珠ちゃんとうぐいすちゃんと悠ちゃんとによる演奏……サプライズのライブが始まる。珠ちゃんは得意のドラムパッドで、うぐいすちゃんもいつものヴェノーヴァ、そして悠ちゃんは、お店に飾ってあった大きなヴァイオリンのやつ（コントラバス？）を弾いている。それを見つめる私は、ビックリして思考が追いつかない。……え、ずっとこれ計画してたの？ いつから？

……いろはのテーマ、と名付けられたその曲は、ゆったりと散歩するようなテンポの曲だった。なんでコントラバスなんて弾けるのかわからないけど、悠ちゃんは指で弦を弾いて、ボンボンと小気味のいい低音を鳴らす。珠ちゃんのドラムは静かな調子で、たまにシンバルがシャボンと鳴ったりしつつ、柔らかいタムの音がボールのように弾んでは、曲の呼吸を感じさせる。そしてうぐいすちゃんは、まろやかなメロディをニュアンスたっぷりに吹いていた。……こういうジャンルの曲、なんていうんだろう。イーजीリスニングかな？ まったりと、いつまでも聴いていたくなるような、そんなムードの曲だった。

ドラムとヴェノーヴァとベースだけしかないのに、こんなに曲らしく出来るんだね。そのあたりは、やっぱりさすが珠ちゃんの作曲なんだろうな。音程のある楽器は実質ヴェノーヴァ

とベースだけなのに、たった2和音でも全然成り立つてる。

ゆつたりと優しく、ちょっとコミカルなメロディ。これが、珠ちゃんのイメージする私なのかな。珠ちゃんはみんなをリードするように余裕たつぷりに、うぐいすちゃんと悠ちゃんは、間違わないようにすごく集中してるのがわかる。……これ、いつから準備してくれてたんだろう？ ……あ、まずい、泣きそう。……あはは。っていうことは、さっき私がハッピーバースデーの歌の話をしたのとか、みんなにはどういう風に聞こえてたんだろ？ ウワア、いろはが誕生日の話をしただしたぞ！ どうする！？ とかって思われてたのかな。……やば、すっごい恥ずかしいかも。

『……ご清聴ありがとうございます！ えーと……改めまして、いろは先輩、お誕生日おめでとうございます！』

「あ、えつと……ありがとうございます……」

珠ちゃんと悠ちゃんからもおめでとうを言われ、拍手が響く。そういえば、今日このお店にいるのって私達だけなんだ？ 唯一いるのは、カウンターにいるお店の人くらい。お店の人も一緒になって拍手をしていた。え、ここ貸し切りにしてるの？ そんなこと出来るの？ なんです？

『それでは、次のプログラムにまいります。次は、いろは先輩にもいまの曲を一緒に演奏してもらいます。いろは先輩、楽器を出してください』

「えっ？」

「キーはFだぞいろは。早く！ この後はケーキが待ってるんだ！」

「ええ！？ ケーキまであるの！？ えっ……でも、私、今日家で夕飯あるし……たぶんケーキもあるし……どうしょ」

「おうちには事前には今日のことは連絡済みだから大丈夫よ、いろはさん♪」

「……準備が良過ぎる……」

『すいません、いろは先輩、シヨルキーの準備をお願いしますか？』

「ああつ！ そうだよね！ すぐ出す！」

なんか私、夢でも見てるのかなあ。いや、こんなの、夢にも思ってたよ。つていうか、え、いまから私即興でやるの？ いや、スケールアドリブくらいならやれるけど……あはは。なにこれ。やばいね。なんだろうこの気分。

『はい、では。プログラム2番、ソリスト・山波いろは先輩で、完全版《いろはのテーマ》です♪』

お客さんのいないステージで、ささやかなスポットライトを浴びながら、私達は演奏する。たつたいま聴いたその曲の雰囲気なぞり、私なりのアドリブを当てていく。メロディを吹いていたうぐいすちゃん、今度は伴奏のメロディに変わっていた。私がリードメロディの、ず

つと私のソロ。……正直、すごいテンパってる。なんかかっこいい感じにしたいと思ってはリズムにつまづいたりして。でもそのたびに、また珠ちゃんがりズムを渡してくれる。悠ちゃんはいつ練習したんだろう？ しつかり弾けてるコントラバスに驚く。

……誕生日を覚えてもらえてるのって、なんで嬉しいんだろうね。ただ自分が生まれた日っただけなのにね。やっぱり覚えていてもらえると、わけもなく嬉しい。これは理屈じゃないのかもかもしれないね。

——あとで聞いた話では、この一週間、私が誕生日の話をしようとするたびにみんなどうにかして話題をそらしまくってたとか。どおりでタイミング合わなかったはずだよね。さつきはかなりヤバかったとか、話逸らすの大変だったとか、珠ちゃんが誕生日の話をした時はヒヤヒヤしたとか、そんな笑い話を胸いっばいに聞きつつ。お腹いっばいにケーキを食べながら、夜の遅過ぎない時間までバードランドには明かりが灯っていた。ずっと今日なら良いのにな、なんて思ったりして。でもやっぱり、私の18歳の誕生日はいつものテンポで過ぎていく。

今日はここまで！